

100

『幼々新書』宋版卷38 零本（内閣文庫）は 金沢文庫本ではない

小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部

演者は昨年の総会抄録号（誌上発表）に「金沢文庫旧蔵の医薬書」と題し、その意義を述べた。そこで今日定説となっている『幼々新書』南宋刊巻38 零本（国立公文書館内閣文庫・63函8号）は金沢文庫旧蔵ではないと断じたが、紙面の都合上、詳しくは言及できなかった。以下、その所以を説明する。

『経籍訪古志』に当該本を著録し、「第三十八、一卷。宋槧本。聿修堂蔵。……巻首尾に『頤神』印を捺す。荻野本『外台』の捺す所と同じ。按ずるに此の本の紙質は荻野本『外台』と相同じ。其の宋槧たること疑なし。……」（原漢文）という。

この記載により、石原明は『彙報金沢文庫』18号（1956）に「新発見の金沢文庫旧蔵医書二種」と題し発表、当該本が金沢文庫旧蔵であると断じた。論拠の要点を抄出すると次のようである。

「筆者（石原）がこれを金沢文庫本と認定したのは、頤神の朱印によったものである。この印記は明かに古く、その字体や朱色から考えてどうしても宋代のものであると考えた。……同種の印記が宋版の『外台秘要』にあり、これが立派な金沢文庫本であることを考え合せると、日本に渡来するまでの間、『外台秘要』と共に同一人の宋人の手にあったことを物語るものである。それが金沢文庫に一括して入り『外台』の方はちゃんと文庫印が捺され、そのまま伝存したが『幼々新書』の方は恐らく何巻かが一冊に綴じられその冊の首尾のみに印が捺されていたものが、のちバラバラになり、遂に第三十八巻だけしか伝わらなかったのでは文庫印がなく、僅かにもとの宋人の印のみ残った結果、文庫本たることが気付かれなかったのであろう。……断じてこれが金沢文庫旧蔵本であることを筆者は信じて疑わない」。

しかし、これは誤認である。すなわち、「金沢文庫」の印のある宋版『外台』は、今日宮内庁書陵部に現存する紅葉山文庫旧蔵の巻3・6・9・11・21・22・23・25・26・27・28、計11巻の残本。一方、「頤神」の印のある宋版『外台』は、今日武田科学振興財団杏雨書屋に現存する荻野元凱旧蔵（のちに福井崇蘭館を経て杏雨へ）の巻2・3・7・12・16・17・19・32・35・40、計10巻の残本。両者の伝来は全く別である（小曾戸『中国医学古典と日本』504頁）。石原明は宮内庁書陵部本を荻野本と誤り、この結論に至ったのである。

『幼々新書』当該本は頤神なる人の蔵を経て日本に渡来。のち多紀氏江戸医学館を経て明治新政府から現在の国立公文書館内閣文庫へと至った。

『外台』宋版（南宋紹興刊本）は複数の揃本が日本へ伝えられた（竹田昌慶将来本、金沢文庫旧蔵本、荻野家本など）。竹田家本は現所在不明。前述のとおり残欠ながら金沢文庫本は宮内庁書陵部、荻野家本は杏雨書屋に伝存する。

内閣文庫所蔵の当該宋版巻38 零本『幼々新書』は、のちに荻野家に入った宋版『外台』とともに日本にもたらされたものであろう。荻野本（杏雨本）『外台』は金沢文庫本ではない。当該『幼々新書』の僚巻にも「金沢文庫」印はなかったに違いない。

以上が、当該『幼々新書』が金沢文庫旧蔵ではないとする理由である。